慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国穀物市場の史的考察（四、完）
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.6 (1924. 6) ,p.847(83)- 854(90)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240601-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は簡單な管理の職分に變化する。」と。最後の目的に於て一致する所の一の世界は、其の手段に關して二つの傾向に分れる。一は此の狀態を事物の自然からして遠き將來の中に實體化せしむるのである。他は此の狀態を一擊の下に招致せんとするものである。(Mautner: Bolschewismus. S. 211) 故に Lenin も亦「排デューリング論中「國家消滅」の有名なる說明は國家の廢止を主張する所の無政府主義者を非難して居るのではない。唯、國家の廢棄が二十四時間以內に可能であると言ふ理論の宣傳に對して彼等を非難して居るのである」と言ひ、(Lenin: Staat und Revolution S. 53) 更に再び「Marx は彼の無政府主義者に對する論爭の眞意が曲解さるゝ事を恐れて進んで次の事を力說して居るのである」として所謂 Marx の眞意を次の如く述べて居る。「國家の革命的過渡的形態は無產者階級のために必要である。併し無產者階級が國家を必要とするのは唯一時的である。窮極目的としての國家廢止の問題に就いて我々は無政府主義者と全く一致して居る。我々の確信する所は此の目的を達成する爲めに武器、手段、方法の一時的利用即ち搾取者に對する國家權力の一時的利用が必要であるといふ事、又同樣に總ゆる階級の廢止の爲めに被壓制階級の過渡的獨裁が必要であるといふ事である」と。(ebenda. SS. 53-54)

Marx の共產主義の眞相を果して以上述べ來りし如く解釋す可きものとせば既往に遡りて Bakunin 等が Marx の共產主義に對する非難攻擊、就中 Bakunin が一八六九年 Berne の平和自由聯盟の大會に於ける演說の一節「私は共產主義を嫌忌する。其れは自由の否定なるが故である。私は自由なくして如何なる人間的のものも想像する事は出來ない。私は共產主義者ではない。何となれば共產主義は社會の總ゆる力を集中して國家に依つて之を吸收せしめ、又それは必然的に國家の手に財產を集中せしむる事を以て終るからである。然るに私の欲する所は國家の廢止である。云々。」(Plechanoff: Anarchism and Socialism. Kerr edition. pp. 80-81 引用する所) の如きは、洵に一見、的を逸したる批評である。而かも此の兩者の關係の機微を洞察する者は、甚だ簡明なる右の一句に於てすら、猶且つ、社會主義と無政府主義との間に介在する深淵の如何に踰越し難きかを感知しないであらうか。

遮莫、此等一切の關係に於ける根本問題は唯物史觀を基調する Marx の進化學說を以て、而して其の經濟的說明を以て、共產主義の敍上の發達の推移を立證し得て遺憾なきや否や、果して其間何等の矛盾をも包藏せざるや否やと言ふ事である。深く此等の諸點を究明する事なくして徒らに未來社會を描出するが如きは假令如何に强辯すと雖も畢竟空想主義たるの譏を免れざる可き事夙に Marx 自身の敎ふる所である。

英國穀物市場の史的考察（四、完）

高木壽一

七

近世英國を以て大體、チュードル王朝の時代を以て始まるものとすれば、近世初期即ち第十六、七世紀を通ずる英國穀物市場の一大特徵はロンドンの如き大都市を中心とする市場——metropolitan market——の發達である。此 metropolitan market とは多額の取引が集中せらるる所の「の中心的大都市を有する一大地域を云ふ。遠

隔の諸港との間の貿易の行はるることあるも、總べてを支配する所のものは中心的大都市と自餘の地域との間の取引である。即ち主として田舍の原料品と大都會の製造品或は輸入品との交換である。總べての貨物は中心的大都會に送られて、價格を決定せられる。換言すれば、價格は其中心地を隔たること大となるに從て遞減するのである。

而して斯る大都市中心の穀物市場が存在するに到りしことを證する現象として次の如きものを擧げることが出來るであらう。

既に述べたる如く第十二、三世紀に於ても、外國より穀物の輸入せられたることあれども、唯國内の凶作の場合のみのことであつた。又第十五世紀に於ては、屢々外國穀物輸入のことありたるを示せども、關税記錄は年と共に其輸入の全く無きか或は極めて少額なるに過ぎざることを示せるが故に、中世を通じて英國は極めて例外的なる場合に於てのみ外國穀物を必要としたるにすぎず、從て穀物輸入貿易に於ては何等の組織も發達しなかつたと云ふことが出來るのである。

然るに第十六世紀に入りて、一の重大なる變化が生じて來た。即ちロンドンの異常なる發達である。ロンドンに於ける貿易は第十四、五世紀に於ては、全國貿易額の約四十一%乃至四十四%を占めたりしに、第十六世紀中にロンドン貿易額は十倍の増加をなし、其全國貿易額に對する比率は八十%或はそれ以上に達した。即ち、關税徴收額に就て見れば左の如くである。

Period	London	Outports	London Percentage
1307—26	£ 5,280	£ 7,421	41.6
1506—09	12,029	14,986	44.5
1536—37	16,970	6,442	72.3
1581—82	35,107	4,905	87.5
1604—05	150,000	40,548	79.0

右の如き貿易の發達と密接なる關係にあるは人口の増加であつた。此時代に關するロンドン人口の充分なる計算は存在せずと雖も、略々其、大體を示すものを以て滿足するとせば、第十五世紀末までは其人口約五萬以下にして、其後、

	ロンドン人口	全國人口ニ對スル比率
一五三四年	六〇、〇〇〇	・二%
一六〇五年	二二四、二七五 〃	五・六%
一六三四年	三三九、八二四 〃	七・六%

の異常なる人口の増加を示した。斯くの如き人口の増加が亦同時に益々大なる穀物の供給を必要とするは自明のことに過ぎない。茲に到つて先づ中世の穀物市場に於けると異る所の一の現象が存在することゝなる。例令一五九四年に時のロンドン市長は、ロンドンは穀價騰貴の時に於ては、外國よりの穀物によりてのみ救はるるを慣はしとすと記したる如く、ロンドンは外國穀物の供給に賴らざる從來の狀態を脱し行くの傾向を示した。茲に第十六世紀初頭並に中葉に行はれたる專ら外國商人によるロンドンの穀物輸入額を見れば左の如くである。

一五〇二—〇三年	三、二〇〇クォーター
一五一二—一三年	一八、二七一〃
一五四九—五〇年	一四、四八八〃
一五五〇—五一年	一四、一四六〃

斯くロンドンの貿易、人口の發達增加による穀物需要の增加は次第に外國穀物の輸入をも必要とするに到り、其組織的輸入貿易と專業的穀物輸入商人とを發生せしめた。然るに之に反しロンドン以外の他の諸港に於ては第十六世紀に於ては、穀價の極く非常に高き時を除きては、殆ど外國穀物の輸入せられたることはなしと云ふことが出來る。

而して外國穀物のロンドンに供給せられたるものは多くバルチック諸地方（Baltic regions）より專らハンザ商人により、又後には和蘭商人によりても供給せられたれども、疑ふ所もなくロンドンに於ける消費穀物量の大部分は外國輸入穀物に非ずして國內供給によるものであつた。

第十五世紀に於ては、ロンドンは Bristol 或は Southampton 等の如きと同樣に特殊の場合の外、其隣接せる地域より穀物の供給を得るを常としたれどもチューードル朝、スチュアート朝の時代に到りては甚だ異れる事情を示した。一五七三年 Court of Aldermen の覺書に、ロンドン附近の地方がロンドンの市場に對して從來常としたる程に充分に穀物を送らざるが故に、沿岸の諸地方に準備してロンドンへの輸送を計るの必要ありと記載したるに徵して稍々漠然ながらも其變化を知ることが出來る。又 Bridge-house の Corn Book には、一五六八—七四年に左の諸港よりロンドンに向け穀物の百二十一回の船積ありたることを記錄されて居る。即 Kent よりは六十二回。Henly 四十一回。Sussex 五回 Suffolk 四回、Essex 三回 York よりは一回の穀物廻送ありたることを記す。而して、一五七九—八〇年に沿岸貿易によりてロンドンに輸送せられたる穀物總額一八〇九〇クォーターにして、Kent より二〇二回の船積、Essex より十七回、Boston より十一回。Suffolk より十回。Sussex より八回。Hull 七回。Lynn 六回、Yarmouth, Southampton 各一回、總計二六三回の船積廻送による。一六四九—五〇年に到りては、其穀物總額は八四六〇七クォーターにして、Kent よりの廻送五二七回を最高とし、Devonshire と Cornwall よりは合計一〇七回。Essex の九四回。Hull の六十回。Suffolk, Yarmouth の各四九回、Southampton 三四回、Sussex 三二回、Lynn の二八回 Boston 九回、Bistol 二回、Newcastle 一回。合計二八九回の船積によつてロンドンに廻送された。

茲に英國々內の地より、ロンドンに穀物を輸送したるものの一例として Lynn を擧ぐれば、其穀物沿岸貿易の量は左の如くである。

	穀物移出總量	ロンドンへの移出量	其比率
1551—52	24.122(Qrs)	1.740	7.2
1558—59	11.629	1.450	12.5
1561—62	35.118	2.861	8.1
1576—77	26.211	12.771	48.7
1584—85	9.445	1.682	17.8
1593—95	20.563	2.221	10.8
1596—97	21.350	10.147	47.8
1600—01	8.098	2.322	28.7
1620—21	11.260	9.373	83.2
1633—34	10.586	5.141	43.5

即ち Lynn がロンドンに輸送する穀物量は次第に增加して、第十七世紀に入りては穀物移出總量の約半ば、或は過半をすらもロンドンに輸送する年を見ることゝなつた。

即ち以上の諸點を約言すれば、少くとも第十六世紀中葉の頃及其以後に於ては、ロンドンは最早其周圍の地方のみに其穀物供給を賴らずして、南方、東方の沿岸諸州に求め、北は遙かに Hull に及び、又中部地方の東部南部にも穀物の供給を求めたことを認めるのである。其地域は益々擴大し、益々多量の穀物はロンドンに輸送せられた。

而して右の傾向は更に進んで、約一世紀の後にはロンドンをして多量の穀物を外國に輸出をさへもなさしむるに到つた。

第十四世紀初頭に於て、豐富なる穀物產地を

背後に備へたるLynnの如き地よりは三千五百クォーター以上、時には五千五百クォーター（一三〇四—五年）の輸出をなしたれども、第十四世紀中葉に近くエドワード三世の治世の頃に到りては、英國よりの穀物輸出は著しく減少し殆ど僅少なるものとなつた。其後第十四世紀後半に入りて穀物輸出は復活し、Lynn, Yarmouth, Hull, Chichester, Ipswich, 等、より主として輸出せられた。其輸出量の概數は其正確なるものを知り得ざるも大體一四六〇—八五年の間には各年約七千八百クォーター内外、一四八五—一五三四年には各年約一萬七千クォーター内外、一五三四—八五年には毎年約二萬四千クォーター内外の輸出を見たるものとせば略々大過なき結果となるであらう。然共一四六〇—一五八五年の間に於ては、專ら其自らの消費穀物を求むるに忙しくして、ロンドンの穀物輸出は殆ど絶無であつた。而もRestoration後に到つては、極めて廣き方面に對して穀物を輸出するに到りしことは最も著しい變化であつた。

而して第十六世紀中葉後に於ける穀物價格（小麥）が如何なる傾向を示たるかを見るに（a）Thorold Rogersの研究と（b）Gras教授がLondon Archivesより得たる資料の結果は左の如くである。

	(a)Rogers 全國平均價格	(b) 卸賣價格	(b) 小賣價格
1531—40	7 s $8\frac{1}{2}$ d	7 s $10\frac{1}{4}$	……
1441—50	10 〃 8 〃	13 $0\frac{1}{2}$	……
1551—60	15 〃 $3\frac{3}{4}$ 〃	19 $7\frac{1}{4}$	……
1561—70	12 〃 $10\frac{1}{4}$ 〃	18 $7\frac{3}{4}$	15 s $3\frac{1}{2}$
1571—80	17 〃 11 〃	20 8	22 $5\frac{3}{4}$
1581—90	23 〃 $11\frac{1}{4}$ 〃	23 $6\frac{1}{2}$	26 $8\frac{3}{4}$
1591-1600	34 〃 8 〃	33 $3\frac{1}{2}$	32 $11\frac{3}{4}$
1611—20	36 〃 $5\frac{1}{2}$ 〃	29 $4\frac{1}{4}$	20 $3\frac{3}{4}$
1531—70	11 〃 $7\frac{2}{4}$ 〃	14 $9\frac{1}{2}$	……
1571-1640	32 〃 $10\frac{3}{4}$ 〃	30 1	31 $1\frac{1}{4}$

右の中、London Archivesより得たる資料は多くロンドン諸組合によりて、地方或は外國にて大量に購入したる價格並に其穀物をロンドンに於て主として其組合員に賣却したる價格を示す。從て後者は其當時のロンドンに於ける實際の市場價格より凡そ一志四片乃至二志八片、即ち平均約二志低廉なる價格に決定せられたるものなることを附記するを必要とする。

而してHoughtonが第十七世紀末の穀價に就きて示せる所を見れば、一六九一—一七〇二年の「クォーターの小麥價格、ロンドン附近の諸州にては四七志餘、ロンドンにては四四志四片餘にして、其他の各地は二志乃至八志餘低く、全英國（イングランド）の平均四〇志五片餘と計算した。其中にロンドンの影響を受けて穀價の高き地方と、全然其影響を受けずして穀價の低廉なる地方とがあつた。ロンドンの影響を受けて穀價の高き地方、即ちMetropolitan Marketの地域内に入るべきものはLower Thames, Upper Thames, East Essex, Southampton, East Kent, Norwich, South West, Cambridge, East Suffolk, Upper Severn,, Battle等にして四七志六片半より三九志餘を示し、又此市場地域外に屬すべきものはYork, Trent, の地方及Wales及Bristolの諸地方にして四六志三片より三三志二片半の價格を示す。右の二種の諸地方Non-metropolitanの中に於てロンドンの影響を受くるMetropolitan Marketの地域の頗る廣大なるを見るであらう。

即ち第十六世紀初頭以後、從來の各地方の都會を中心とする地方的市場の上に更に全英國（インゝランド）の大部分に亘る一大市場の形成に向ふ強き傾向が現はれ、同世紀の後半より益々其勢を強めて第十七世紀中葉には、全英國（インゝランド）の大部分に確實に其市場地域を擴大した。

而して、此ロンドンを中心とする Metropolitan Market の形成に當りて三個の自然的條件が其發達を助けた。即ちロンドン周圍の地方の豐饒なりしこと、河川、海上による運輸の便、世界貿易路に對する其位置等である。ロンドンに近き諸州は最も肥沃の地を有する、Norfolk, Upper Thames, Sussex, Kent 及 Cambridgeshire, 等にして、其等の諸州の穀物は初めロンドンに於て消費せらるる所要穀物の全部或は大部分を又後には更に外國輸出の穀物をさへも充分に供給するの生産力を備へた。之等の諸州の穀物生産力の大なりしことは、ロンドンをして大穀物市場の中心たらしめたれども、又同時に其等の諸地方の耕地の擴大、耕作法の改良等による産出額の增加を齎らせる誘因は元よりロンドンに於ける益々增加し行く穀物需要であつた。又陸路運輸による穀物取引は到底長途遠隔の地域に亘ることが出來ない。河川海路の便に惠まれたる地のみ大なる市場中心地となることが出來た。而も更に對外的貿易に有利なる位置を占むるの條件は、Bristol, Southampton をして全國的穀物市場の中心地たらしめざりし一の有力なる原因であらう。之に反して、其等の諸條件は孰れもロンドンをして同市場の一大中心地たらしむるに貢献した所のものである。（Gras: Evolution of the English Corn Market p. 73-77. p. 95-129 に據る）（終）（筆者の不備のために記すべき多くのことを殘したのは慚愧に堪えない。若し他日許されて補正の時をも得ば幸である）

經濟學諸概念の社會心理學的考察（下）

上原好咲

六

慾望、滿足、効用に關するム教授の心理學的研究の諸點は略ぼ此に盡きて居るが、就中教授の以て最も重要な論點として居る處は、慾望又は効用の力學的前進といふ點に在ると思はれる。即ち一財貨から擧揚される効用は、前記の如く上向、停頓、下向の曲線の上を推移するが、その間雜多、差別、新規等の分裂作用は必然的に意識の新分野を展開して、依つて滿足の飽滿や倦怠、衰退や休止を防ぐが故に、右の下向曲線は効用の零を示す一定點に達する前に方向を轉換して、再び上向に移るといふのである。

然らば再び上向するその曲線はどう落ち付くか。茲に於て教授は進歩の螺狀線（the spiral of progress）なるものを想像して居る。即ち下向から上向に移つた効用の曲線は再び停頓及下向の順路を踏んで三度上向に轉ずる。之れが律動的に循環すると其處に價値の螺狀線、生産の螺狀線といふやうなものが作られるといふのである。教授の見る處に依ると律動的循環なることは自然界の一切の運動を支配する根本法則の一つであつて、價値、消費、生産、人口といつた諸般の經濟現象も、之れを力學的に見る時、皆な此循環運動を續けつゝ前進するものといふ外はないのである。

即ち價値の螺狀線（the spiral of values）を說いて、「曰く我等が心理的並に社會學的進化の過程に於て、自然主義的官能的から理智的審美學的に、利己的又は個人主義的から利他的且つ社